

# 東北公益文科大学 総合研究論集

第 27 号

The Katherine Group における  
フランス語借入語からみた‘AB 言語’再考  
—異写本パラレル・テキストを用いて—

狩野 晃一

2015 年 1 月 23 日発行

# The Katherine Group における フランス語借入語からみた‘AB 言語’再考 — 異写本パラレル・テキストを用いて —

狩野 晃一

## 0. はじめに—借用語研究概観

13世紀初頭、一群の宗教散文が西中部方言で書かれた。『修道女案内』 *Ancrene Wisse* と「キャサリン・グループ」The Katherine Group (『聖キャサリン伝』 *St. Katherine*、『聖ジュリアナ伝』 *St. Juliana*、『聖マーガレット伝』 *St. Margaret* の三聖者伝と、『聖なる処女性』 *Hali Meidhad* および『魂の守り』 *The Sawles Warde* の5作品を含む)である。*Ancrene Wisse* が書かれている Cambridge, Corpus Christi College, MS 402 をA写本とよび(その言語を「A言語」)、Katherine Group が残されている Oxford, Bodleian Library MS Bodley 34 をB写本(その言語を「B言語」という。J. R. R. Tolkienによって1929年に書かれた“*Ancrene Wisse and Hali Meidhad*”という論文中でA写本の言語とB写本にある言語(Tolkienは特に *Hali Meidhad* を取り上げた)について、音韻、形態、綴りを対象として検証した。その結果、両者には著しい類似が見られることを指摘した。これがいわゆる「AB言語」と Tolkien が呼ぶものであり、13世紀初頭の西中部地方に確立されていたであろう標準的書き言葉であると主張したものである。

その後、Chambers (1932) はAB言語を英語散文の連続性の中に位置づけて、Englishness の継続性におけるAB言語による宗教散文の重要性を説いた。しかし1950年代以降、徐々にAB言語の中に内在する異質性や多様性を強調する考え方が提示され(Clark 1966, 1977)、ラテン語修辞法の影響(Morgan 1952; Shepherd 1959, 1972)、ヨーロッパ大陸からの文体的影響を受けた可能性(Millet 1983, 2005)などが指摘されてきた。

作者や成立年代特定に関しても、借入語研究を通しての様々な問題提起がな

されてきた。*Ancrene Wisse*における借入語については、ゲルマン語系は Zettersten (1965) によって、またフランス語系の借入語の調査は Zettersten (1969) によってなされている。Katherine Group における借入語の研究は Dor (1979, 1983: 動詞の形態)、Dor (1977: Katherine Group と *Ancrene Wisse* 写本間の語彙の多様性について扱っている)、Clark (1966)、<sup>1</sup> Bately (1988)、<sup>2</sup> 最近では Trotter (2003) などにより進められてきた。

上に挙げた研究により *Ancrene Wisse* や Katherine Group といった初期中英語作品にみられる借入語の選択要因については大部分明らかにされてきたといえる。特に語彙の選択は、散文ではあっても文体上の制約を受けることがしばしばあることが判明している。しかし、借入語がどの程度英語に吸収されていたのか、どの程度英語化されていたのか、語彙の選択の基準は何によっていたのか、また写本間における借入語の異同の状況はいかなるものであったのか、などの問題には更なる調査が求められる。

本論においては B 言語にあらわれる古フランス語 (あるいはアングロ=ノルマン語) 由来の語彙について、いかにそれらの語が英語に取り入れられていたのかを語の形態と頭韻の利用などの観点にしぼって検証を試みる。またパラレル・テキストを用いての異写本間の比較を通して、書き手・読み手 (scribe (s) / reader (s)) の違いによる借入語への態度も含めて論述する。<sup>3</sup>

## 1. 写本・写字生・作品の量・文体

A 写本と B 写本に残されている作品は複数写本に見られ、また、ある程度のまとまりを持って各写本に残されている。*Ancrene Wisse* は A 写本を含め (断片を含め英語で書かれたものは) 12 の写本に現存し、B 写本に含まれる作品 (*St. Katherine*, *St. Juliane*, *St. Margarete*, *Hali Meiodhad*, *Sawles Warde*) は 3 写本に残さ

<sup>1</sup> AB テキスト内で用いられるフランス語借入語の様相に注目。スタイルやテキストの扱う主題の違いに拠る結果であると言いつつも、作品自体の年代や作者の違いに起因するとも述べている。

<sup>2</sup> Clark (1966) に対し作者や制作年代を特定するには調査資料として不十分であるとし、それ以外の多様な要因が絡んでいると議論を展開している。

<sup>3</sup> 異写本比較には Ono, Shoko and John Seahill, with Keiko Ikegami, Tadao Kubouchi, Harumi Tanabe, Koichi Nakamura, Satoko Shimazaki, Koichi Kano, eds. *The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text*. (Peter Lang, 2011) を使用する。

写本と作品の分布表

	AW	SK	SJ	SM	HM	SW
Cambridge, Corpus Christ College, 402	○					
Cambridge, Gonville and Caius College, 234/120	○					
Cambridge, Magdalene College, Pepys 2498	○					
London, British Library, Cotton Cleopatra C. vi.	○					
London, British Library, Cotton Nero A.xiv.	○					
London, British Library, Cotton Titus D.xviii.	○	○			○	○
London, British Library, Royal 8 C.i.	○					
London, British Library, Royal 17 A.xxvii.		○	○	○		○
Oxford, Bodleian Library, Bodley 34.		○	○	○	○	○
Oxford, Bodleian Library, Eng. th.c.70	○					
Oxford, Bodleian Library, Eng.poet. a.1	○					
Oxford, Bodleian Library, Laud misc.	○					
Oxford, Bodleian Library, Laud misc. 381.	○					

れている。以下に表にまとめて示す。

MS Bodley 34は全て1人の写字生によって書かれており、筆写された時期は1200年から1225年の間。MS Royal 17 A. xxviiには3人の写字生が関わっていて、1人目(写字生a)はff. 1r-8v, 11r-45rの第1段落、2人目(写字生b)はff. 9r-10v, 58v-70v、そして3人目(写字生c)はff. 45v-58rを担当している。筆写されたのは1220年から1230年の間であるという。MS Cotton Titus D. xviiiは1人の写字生によって1225年から1250年の間に写されたとされている。<sup>4</sup>

作品の大きさはMS Bodley 34を基準とすると、それぞれ*St. Katheirne*: f. 1r01 - f. 18r14, 864行、*St. Margaret*: f. 18r14-f. 36v16, 930行、*St. Juliana*: f. 36v17 - f.

<sup>4</sup> 諸写本情報についてはMargaret Laing, ed. *Catalogue of Sources for a Linguistic Atlas of Early Middle English*: Suffolk: D. S. Brewer, 1993およびMillett and Dance, 2006を参照。

52r23, 782行、*Hali Meiðhad*: f. 52v01 - f. 71v21, 971行、*Sawles Warde*: f. 72r01 - f. 80v25, 450行となる。

文体は聖者伝3作品とその他に分かれる。聖者伝には頭韻の使用が顕著で散文ではあるがリズムカルな文体をもつ。一方*Hali Meiðhad*には修辭的に凝った文体が用いられ「処女性」の徳について語られている。そして*Sawles Warde*は寓意的な説教散文で、これもまた高度な修辭的技法の用いられたものである。

## 2. 頭韻、混種語および固有名詞

Katherine Groupに属する作品はいずれも散文で書かれてはいるが、その語り口は単調というよりは、頭韻などを用いてむしろリズムカルでさえある。また頭韻のヴァリエーションも豊かである。Millett (1982) には*Hali Meiðhad*における頭韻の使用について以下に示すように簡潔にまとめられている。

It is clear that *Hali Meiðhad* is linked with the rest of the group by numerous verbal parallels, usually brief but sometimes more extended. Some are alliterative collocations: these are shared mainly (though not exclusively) with the saints' lives of the 'Katherine group', which make a relatively heavy use of alliteration. A few of them, like *licomes lustes* and *sorhe ant sar*, are traditional and can be found elsewhere in Middle English literature; others, such as *awakenin ant waxen*, *hofles ant hoker*, *tolimet lið ant lire*, *selhðe ant sy*, and *weorrið ant warpeð*, seem to be confined to this group of texts. It is always possible that even those alliterative phrases not recorded elsewhere are part of a broader stylistic tradition not confined to the 'AB group', but it is worth noting that they are often used in similar contexts in different works of the group --- *weorrið ant warpeð*, for instance, is used figuratively in both *Hali Meiðhad* and *Seinte Margarete* to describe sexual temptation attacking chastity.<sup>5</sup>

---

<sup>5</sup> Bella Millett (1982), p. xix.

現存する資料には残っていないけれども、恐らくある種の「型」がAB言語作品内にとどまらず存在していたと考えられる。伝統的な古英詩や古英語による散文にみられるタイプとは異なるが頭韻の伝統は続いていたに違いない。13世紀の抒情詩においてもまた頭韻を意図した句が数多く確認されるからで、このことは頭韻の伝統が英語においていかに深く根付いていて利用されていたかを示している。<sup>6</sup>

混種語 (hybrid) も借入語が英語に取り込まれた、あるいは馴染んだ証拠として用いることが可能であろう。特に動詞の形態について興味深い事例が見られることは周知のことである。例えば *of-, for-, bi-*、過去分詞をあらわす *i-* (< OE *ge-*) などの接頭辞、人称や時制の違いを示す語尾の変化 (*-eð, -et, -ed, etc.*) を付して、あたかも英語由来の語であるかのように自由に屈折するもの。また接尾辞の *-ship, -dom, -lich(e)* を付けて品詞を転換するものなどが挙げられる。

### 3. フランス語からの借入語概観

フランス語借入語はノルマンコンクエスト (1066年) の後に押し寄せるように英語に入ってきたとされる。ノルマンディー公ウィリアムが王座に就き、政治、法律、宗教と、社会のあらゆる分野にフランス語起源のことが浸透した。西中部地方の修道院内で書かれたであろう宗教散文に用いられたAB言語でも広くフランス語起源のことが使われている。先行研究において *Ancrene Wisse* と *Katherine Group* に現われるフランス借入語の状況が示されてきており、*Katherine Group* に用いられたフランス語からの借入語は *Ancrene Wisse* に比べると比較的少ないということが言われている。これは、次ページに載せた Clark (1966) の表において明確に示されている。

これは確かに本文の量の違いにも関係するであろうし、また内容的な相違を反映しているとも考えられる。Clark (1966) によれば *Katherine Group* のうちでも聖者伝3作品においては抽象的な語彙の使用は少ないけれども、*Hali*

---

<sup>6</sup> 関連する問題について詳しくは Fifield, Merle, 'Thirteenth-Century Lyrics and the Alliterative Tradition', *JEGP* vol. 62, no. 1 (1963) を参照のこと。

## Frequency of the French Loanwords

TEXT	TOTAL	LOANWORDS	%
Ancrene Wisse 6&7	1270	136	10 ½
Hali Meidhad	1265	80	6⅓
Sawles Warde	690	29	4
St. Katherine	1420	55	4 (almost)
St. Juliana	1175	34	3 (almost)
St. Margaret	1340	34	2 ½

Adopted from Clark (1966), p. 118

*Meidhad*に限っては逆の現象が見られるといている。<sup>7</sup> 抽象的な借入語彙が出現する頻度は書かれている内容に比例するものと考えられる。

さて、借入された語彙が抽象的であろうとそうでなかろうと、一体これらの語はどれほど英語として作者、又は読者に受け入れられていたのだろうか。これまでの研究者は様々な判断基準を示しフランス語からの借入語が英語へどれほど馴染んでいたのか、またはそうでないのかを論じてきた。

D'Ardenne (1961) は 本来語とフランス語からの借入語との組み合わせ (ワード・ペア) について興味深いことを言っている。例として *Ancrene Wisse* から *leccherie þ is galnesse* 'lechery that is lust' を挙げているが、本来語は意味の不明なフランス語の説明としてではなく、むしろ英語の方を保っておきたいという気持ちの現れではないかという。また *simplete of semblant* といったフランス語由来の借入語のみで出来上がっている表現が存在していることからしても、多くのフランス語は英語として受け入れられて久しいと d'Ardenne は考えている。

The similar conjunctions of English and French synonyms are thus not necessarily to be understood as gloss on the French, and are rather parallel to the alliterative pairing of archaic and current English synonyms.

---

<sup>7</sup> Clark (1966) p. 121 を参照。

そうであるとすれば、フランス語からの借入語は本来語と頭韻をもつワード・ペアを形成しうるほどに英語化していたといえるのではないか、というのがd'Ardenneの主張である。<sup>8</sup>

Clark (1966) はフランス語要素の英語への順応を(1)compounding with native elementsと(2)inflexionsという2点を通して検証しようとした。具体的には(1)の英語要素との複合化というのは、接頭辞や接尾辞を付けることを指し、(2)の屈折はフランス語起源の語が英語のように変化あるいは活用することをいう。このような結果がみられるのはフランス語からの借入語が既に長いあいだ英語の中に存在し、また外国語として気にならない普段使いのためであるからだという。<sup>9</sup> 混成語を容易に作れるようであれば語幹となるフランス語起源の語の意味はすでに理解されているはずであるから、Clarkの方法論は本論でも効力を発揮するだろう。さらに借用語が含まれている固有名詞(人名・地名)にも触れ、借用語の英語への浸透の度合いを測る目安としたい。

### 3.1 ABテキスト以前のフランス語からの借入語

*Ancrene Wisse*およびKatherine Groupにあらわれるいくつかのフランス語起源の語は既にそれら以前のテキストにみられる。例えば*prud* 'valiant', *castel* 'castle', *gingifer* 'ginger' などaristocratic values & tastesをあらわす語はノルマンコンクエスト以前の文献にあらわれる。<sup>10</sup>

また12世紀の例として『ピーターバラ年代記』*The Peterborough Chronicles* (1121-1154)にみられる政治・社会的な語彙*tur* (of London) 'tower', *werre* 'war', *pais* 'peace' や、キリスト教に関する語彙*clerc* 'scholar', *messe* 'mass' や、地位を表す*duc* 'duke', *cuntesse* 'countess', *emperice* 'empress'等の語、封建的貴族階級

<sup>8</sup> D'Ardenne(1961), p. 177.

<sup>9</sup> またDor (1992) は従来のフランス語からの借入語を調査した頻度表に言及し、13世紀前半の不自然な盛り上がりに着目している。初出の時点から次に使用が確認されるまでに時間があいている語は、実は初出の段階では英語としてはみなされず、未だ外国語としてのフランス語の状態であったと仮定する。その場合には表の不自然な盛り上がり部分はよりスムーズになり、借入語過程もより自然なカーブを描くと考えている。Dorはフランス語要素がどのように文脈上用いられているのかを様々な角度から調査しているが、そのなかで頭韻であるかどうかにかかわらず、翻訳してゆく型(重複語の組、先に挙げた*leccherie þ is galnesse*のような組)を用いて文体的工夫をこらす傾向があると述べている。

<sup>10</sup> Burnly (1992), p 429 を見よ。

に関する語彙である *rente* ‘income’, *curt* ‘court’, *tresor* ‘treasure’, *prisun* ‘prison’ などが挙げられる。ここに列挙した語は頻繁に AB に現れ、既に英語化されていた。

### 3.2 頭韻語のワードペア・定型句

先に挙げた AB 以前の文献にあらわれる語の内 *prud*, *werre*, *clerc*, *cuntesse*, *rente*, *curt*, *prisun* は頭韻語の一部として用いられている。

これらの語以外でも例えば定型句として何度もあらわれる借入語がある。複数作品に確認される定型句で頭韻を形成しているものに、*kempene crune* ‘champion’s crown’ (SK, SM, HM),<sup>11</sup> *godes grace* ‘God’s grace’ (and the like, e.g. *grace of god*, etc. SJ, SM, HM), *milce and merci* ‘pity and mercy’ (SJ, SM, HM), *weorrið and warpeð* ‘wage war and throw in combat’ (SM, HM), *mix maumez* ‘vile idols’ (SK, SJ), *pine and/oðer prisun / passiu* ‘torment and/or prison/passion’ (SK, SJ, SM), *wið pel and wið purple* ‘with fine purple cloths’ (SK, SJ) などがある。またそれぞれの作品にも *crune upon crune* ‘crown upon crown’ (HM), *dute of deaðe* ‘fear of death’ (SJ), *feble (as) flesch* ‘feeble (as) flesh’ (HM), *sune (s) spuse* ‘son’s spouse’ (HM), *prude prince* ‘proud prince’ (SK), *baleful beast* ‘baleful beast’ (SJ), *bittre beast* (SM), *icrunet to criste* ‘crowned to Christ’ (SJ), *kinges icrunet* ‘crowned kings’ (SM) が現れる。<sup>12</sup> ここでは B 言語に確認される用例を示すに留めて後に再びふれる。

### 3.3 混種語の形成

AB テキストにはフランス起源語を語幹とした混種語が多く観察される。混種語には、フランス語が語幹となり、(1) 古英語起源の接頭辞が付く語、(2) 古英語起源の接尾辞が付く語、そして(3) 古英語の(屈折)語尾が付く語の3種類が存在する。

(1) 古英語由来の接頭辞+フランス借入語幹

動詞語幹に付く接頭辞には *a-* (< OE *a-*), *i-* (< OE *ge-*), *of-* (< OE *of-*), そして *un-*

<sup>11</sup> ‘crown’ (MED *coroune* (n.) < OF *corone*, *corune*, etc.) は『ピーター・バラ年代記』でも頭韻の要素として用いられている。1111年の記述 *On þison geare ne bæR se kyng Henri his coronan to Christes messan ne to Eastron*にある(下線は筆者による)。

<sup>12</sup> 頭韻ではないが、*poure & riche* ‘poor and rich’ という2つの形容詞は両極を示す対比として用いられており、両方ともフランス語起源であるがその意味する所は理解されていたと思われる。

(< OE *un-*) がある。例を挙げると *icheret* (pp.), *icrunet* (pp.), *ofdute*, *iginet* (pp.), *ihurt* (pp.), *unhurt*, *iordret*, *irobbed*, *ipa i'et* (pp.), *iprude* (pp.), *isealede* (pp.), *ofseruet* (pp. as adj.: also *oferunge*), (? ) *acangen*<sup>13</sup> などがある。また *ouer-* (< OE *ofer-*) のついた形容詞 *ouerhardi* ‘too bold, too daring’ (SW) などがある。

#### (2) フランス語からの借入語幹 + 古英語由来の接尾辞

この項目に入れられるのは抽象名詞を形成する接尾辞 *-dom* (< OE *-dōm*) が付くもの *martyrdom* (SK, SM) が挙げられる。さらに形容詞や副詞を作る接尾辞 *-liche* (< OE *-līc*, *-līce*) が付いた *beastliche*, *folliche*, *prudeliche* などがある。OE *-ful* 由来の ME *-ful* (e) が付いた *pinful*

#### (3) フランス語からの借入語幹 + 古英語由来の語尾

格や数を支配する名詞語尾がみられる。属格をあらわす語尾 *-en* が付いた *crunene* ‘of crown’ (SM)、また与格複数をあらわす *-en* がある *patriarchen* ‘patriarchs’ (SJ) などが確認される。名詞においては古い変化の形態が借入語に用いられていることは注目に値する。

動詞の語尾は全て英語の規則に則って変化する。原形は *-en*, *-i* で、過去形 *-ede*, 三人称単数現在形 *-et*, *-eð* などが自在にフランス語からの借入語幹に付く。

(1) の例語を参照のこと。

### 3.4 固有名詞 (人名・地名) に残る借用語

AB 言語で用いられているフランス語からの借入語の中にはノルマンコンクエスト以前の文献に現れるもの、それから AB 以前の文献に現れ古くから英語に取り入れられてきた語彙が存在し<sup>14</sup>、それらは頭韻に積極的に利用されてい

<sup>13</sup> この語をめぐる様々な議論ある。MED (v.) *acangen* ‘to be beside oneself, act silly’ と見出しと語義は掲載があるが、語源については記述がない。語源には2つの説があり、ひとつには古ノルド語 (古アイスランド語で *kangin-yrði* は ‘jeering words’ の意。OE *canc* ‘scorn, derision’ もある。スウェーデン語の *kång* は ‘wanton, spirited, lewd’ の意で、Stratmann-Bradley の中英語辞典にて比較させている。) で、もう一方はフランス語起源というもの。

D’Ardenne and Dobson (1981) では *cang* (n.) ‘fool’ の動詞派生形であるといっている。この *cang* は AB 言語に特有のもので、派生語の使用も AB 言語内に限られている (*canglich* (adv.), *cangschipe* (n.), *cangede* (ppl. adj.))。

<sup>14</sup> 頭韻および混種語で用いられる語については既に「頭韻語のワード・ベア・定形句」のところでも触れたが、改めて MED に現れる AB テキストよりも初出の早いフランス借入語を以下に示す。

*barre*: a1225 (?OE) Lamb.Hom. (Lamb 487) 131: He..tobrec þa irene barren of helle.

*crune*: a1121 Peterb.Chron. (LdMisc 636) an.1111: On þison geare ne bæc se kyng Henri his coronan to

る。これらの語が既に英語化されていた様子の左証となる現象はまた固有名詞に求めることができるだろう。特に名詞、形容詞の類いは固有名詞として用いられやすく記録に残りやすい傾向があり、もし地名や人名の苗字としてABよりも古い、あるいはABとほぼ同時代の文献に記録があるとすれば以前から用いられていたに違いない。<sup>15</sup> 個人名(苗字)に用いられるということは名詞なり形容詞の意味がその当時すでに知られていることを示すのではないか。また固有名詞には頭韻句にもみられるような *Godesgrace*、また *Manclerc*, *Damesone*, *Stonhardi* や *Swetsemblaunt* (古英語+フランス語) など複合語/混種語となることが多い。初出の用例とあわせ、これらの例から語幹のフランス語由来の借入語が英国/英語内においてある程度定着していたと言える。さらに、フラ

---

*Christes mæssan ne to Eastron.*

*crunen* (v.) : a1225 (?OE) Lamb.Hom. (Lamb 487) 129: Ure drihten hine [Adam] crunede mid blisse and mid wurðscipe. / or ?c1200 Orm. (Jun 1) 7125: Forr nass he [Herod] nohht þurh Godess follc O Godess hallfe crunedd.

*cuntesse*: ?a1160 Peterb.Chron. (LdMisc 636) an.1140: þe kynges dohter..nu wæs cuntesse in Angou.

*curt*: a1225 (?OE) Vsp.A.Hom. (Vsp A.22) 231: An rice king.. 3eclepien all his underþeod, þat hi bi ene fece to his curt come sceolde./ ?a1160 Peterb.Chron. (LdMisc 636) an.1154: Þa was he..to king bletcæd in Lundene.& held þær micel curt.

*feble*: a1225 (?OE) Lamb.Hom. (Lamb 487) 47: His licome wes se swiðe feble þet he ne mihte noht iþolie þe herdhnesse of þe rapes.

*merci*: a1225 (?OE) Lamb.Hom.DD (Lamb 487) 43: Lauerd, haue merci of us, forðon þa pinen of helle we ham ne ma 3en iðolien.

*prude*: a1225 (?OE) Lamb.Hom. (Lamb 487) 5: Ne beo þu, þereuore, prud ne wilde ne sterc ne wemod ne ouer modi.

*sot*: c1175 (?OE) Bod.Hom. (Bod 343) 80/25: Gif nu sum sot wæneð þat he wrohte hine sylfne, [etc.].

*sollice*: ?a1160 Peterb.Chron. (LdMisc 636) an.1137: He hadde get his tresor, ac he to deld it & scatered sotlice.

*weorre*: (a) ?a1160 Peterb.Chron. (LdMisc 636) an.1140: Þer efter wæx suythe micel uuerre betuyx þe king & Randolf eorl of Cæstre.

<sup>15</sup> MEDでは苗字や地名としてフランス語からの借入語が12世紀(AB texts以前)から用いられている例がかなり多く見られる。ここに1200年前後の例を示す。

*gin*: (1191) Henricus Gin.

*kecchen*: (1208) Willelmus Cacheluue, etc.

*clerc*: (1208) Walterus Manclerc, etc.

*dame*: (1273) Henry Damesone.

*grace*: (1243) La Gracedeu./ (1298) William Godesgrace.

*hardi*: (1194) Godardus filius Stonhardi/ (1194) Willelmus Hardi./ (1206) Gaufridus Hardy.

*prince*: (1166) Rogerus Prince/ (1177) Robertus Prince.

*prud*: (1199) Gill. Prudhume / (c1200) Robertus Prudfot / (1205) Martinus Prudume.

*semblant*: (1256) Gilebertus Swetsemblaunt.

*sot*: (1202) Thomas Sote.

ンス語起源の動詞をまるで古英語由来のものとして接頭辞を付加し、巧みな語尾変化をさせている混種語型も多く散見されることなどが挙げられる。

## 4. 異写本比較による語彙選択の検証

### 4.1 BのみF起源語ありの場合

B 50r10, R 68r13 (SJ: unhurt)

B & acwente hit anan . eauer euch *sperke* . & heo stod **unh/urt**

R ant hit / cwenchte anan euer euch *sperke* . ant heo stod **unweommet** /

B 50r11, R 68r14

B þer amidheppes heriende ure healent wið

R heriende hire hehe healent wið

B 50r12, R 68r15

B heheste steuene .

R lude stefne . /

ここではB写本 *unhurt* とR写本 *unweommet* という語彙の異なる選択が観察される。両方の意味は「汚れない、傷なき」というものであるが、B写本がフランス語からの借入語 (OE *un-*+ OF *hurte*) であるのに対し、R写本は本来語 (OE *unwemmed*)。Bの *unhurt* は明らかに頭韻が存在する文脈に意識的であり (*heriende*, *healant*, *heheste* (おそらく *amidheppes* も))、R写本の *unwemmet* という選択では頭韻が成立しない。

### 4.2 R写本のみフランス語起源の借入語ありの場合

B 41v21, R 61r05 (SJ: dute)

B for na deað̄r þ ich schule drehen .

R for nan wondreðe . ne for **dute of deaðe** þah ich hit schulde / drehen .

B 49r13, R 67r19 (SJ: ofseruinge)

B for me iwraht . wið\_ute mine **wurðes** . Beo mi blis/fule

R iwraht wið\_uten min **of\_seruin/ge** . beo nu blisful

B 38r08, R 57r15 (SJ: riche)

B leaden him i cure up\_o fowr hweoles . & teon

R leaden him into / cure . & te **riche riden** in . & tuhen

R写本のみフランス語からの借入語がみられ、B写本には本来語がある、またはR写本に対応する語が存在しない例を見てみる。<sup>16</sup> B *wurðes* ‘merit (s)’ (< OE *wyrþe*) は *wiðute mine wurðes* ‘without merit (s) of mine’ というフレーズにおいて /w/ で頭韻を形成しているが、Rでは混種語の *ofseruinge* ‘deserving’ を用いているために頭韻が壊れている。<sup>17</sup> R写本に *wurðe (s)* という同語形は存在するが、この場合は ‘fate’ という意 (< OE *wyrd*) で、*áwei ower wurðes* ‘alas for your fate’ (B 40v07, R 59r19) というフレーズに現れる。Rの写生字は語形の類似からくる意味の混乱を避けるため、あえて *ofseruinge* を用いたとも考えられる。

#### 4.3 R写本にフランス語起源の借入語のみ (頭韻ワード・ペアなし)

B 35v16, R 55r15 (SM: merci)

B do me **merci** . & **milce** of þis dede of þis sun/ne

R do me **merci** . / of þis dede . of þis sun/ne

頭韻ワード・ペア *merci* & *milce* は Katherine Group 作品において一般的な言い回しで、語の順番は様々だが、かなり頻繁に用いられる。*St. Margaret* のこの箇所は、本来語の *milce* (< OE *milds, milts, mils*) が欠落している。<sup>18</sup>

<sup>16</sup> *Prude* ‘magnificence’ は本来フランス語から入ってきた語で、およそ1000年頃に古英語に定着したものと考えられている。これをフランス語からの借入語と扱うか、あるいは古英語として扱うか議論が分かるところであるが、フランス語として採ると仮定して、以下に該当箇所を示す。

B 43v21, R 62v04 (SJ: *paraise - prude*)

B hit am . þ weorp ut adam & eue ⁊ of **paraise sel/hõe** .

R weorp adam ant eue of **paraises pru/de** .

B 48r22, R 66v07 (SJ: *prude*)

B of eue . & wes iput sone ut of **paraise selhøden** . we/ox

R of / eue & wes iput ut sone of **paraises prude** & weox

B 43v21 および B 48r22 の両方で、B写本 *paraise selhøden* に対し R写本 *paraises prude* となっている。B *selhøden* ‘happiness, joys’ は OE *gesælþ* が起源であるが、R写本では *prude* が用いられ、B写本では意図されていない頭韻がR写本では成立している。

<sup>17</sup> *ofseruinge* は動詞 *ofseruin* の動名詞形。もともと古フランス語の *deservir* ‘deserve’ に由来するが、これが完全に翻訳された形 *ofearnin* (MED *ofernen* (v. (2))) と不完全に前綴りだけ訳された形 *ofseruin* が存在する。

<sup>18</sup> この周辺のテキストにはB写本とR写本の間にかなりの混乱がみられる。以下にその著しい箇所を示す。

#### 4.4 R写本にフランス語からの借用語がなくOE起源語のみ

B 30v15, R 50r17 (SM)

B men . & hearmið & **weorrið** hare werkes . Ah

R & harmeð hare werkes / ah

R写本には *werkes* ‘works’ の/w/音と頭韻をなす語 *weorried* ‘to wage war’ が抜けている。本来語 *harmið* ‘to harm’ (< OE *harmian*) のみで ‘harm their works’ と意味は通じるが、*werkes*と頭韻を踏まない。あるいはR系の写本では *harmeð* と *hare* ‘their’ という頭韻を採用したとも考えられる。

#### 4.5 語順による頭韻効果の違い (R写本においてよりリズムカル：頭韻語動詞が接近している)

B 40r13, R 59r07 (SJ: riche)

B þe **riche** † reue is ouer\_rome . ant he schal þe for/readen .

R þe **riche** reue irome ant he schal for swelten ant for/reden

B 46r03, R 64r16

B † he droh for moncuñ milce haue & **merci** wummon of

R † he droh for mon milce ant **merce** wummon haue of

ここに挙げた2例とも、B写本よりもR写本における語の配置はリズムカルな頭韻をいっそう意識したものとなっている。

写本ごとの比較では、B写本では見られない(または失われている)頭韻のリズムをR写本ではフランス語起源の語を用いて回復している箇所が数カ所あ

---

B 35v12, R 55r11

B in . & † bodi beide & † scherpe sweord scher

R in . ant tet scharpe sweord . & / eke smart . scher

B 35v13, R 55r12

B hire wið þe sculdren & beah to þer eorðe . & te

R hire bi þe sculdren . & sahede hire / þurh\_ut . ant te bodi beide . & beh to þer eorðe . þe

B 35v14, R 55r13

B gast steah up to † istirrede bur bliðe to heou'e'ne .

R gast / ananriht steh up . in\_to þe stirrede bur bliðe to heoue/-ne .

B 35v15, R 55r14

B He þe þene dunt ʒef: ʒeide mit tet ilke . Drih/tin

R þe þe te dunt ʒef' ʒeide . lude stefne . drihtin

る。*St. Juliana*において頻繁に写本間の異同が観察されることは特筆すべきであろう。

## 5. 結論—異写本間における借入語の異同から

フランス語からの借入語がいかにかに英語に浸透していたかということについて、次の2点が指摘できる。すなわち(1)頭韻を意図したと考えられる箇所用いられていることから既に英語に取り込まれていた可能性が高い。頭韻句には一定の型がみられるが、これはAB言語のみにみられるだけでなく、同時代の他(方言)の作品にも用いられていることがしばしば観察される。(2)混種語(接頭辞や動詞語尾がしばしば付加されている)の様々な形態が散見されることはそれらの語彙が十分に英語に馴染んでいる左証である。

現存する写本を比較するとB写本とT写本は互いに類似していることが即座に見てとれ、フランス語からの借入語に限ってみても語彙の選択においても然程の相違はない。R写本が他の2写本と大きく異なる箇所は、写字生bの受け持った*St. Juliana*に顕著に現れる。ここではフランス語からの借入語はわざわざ頭韻を回復するために用いられ、頭韻を形成することにどちらかといえば積極的である。R写本の写字生bのみの手元においていた手本 *exemplar* が他の写字生のそれと異なるのか、あるいは写字生bの時代と彼自身の言語の特質または方言であるのか、これをどのように解釈するかはテキストおよび文脈上のより一層の詳細な比較研究が必要となる。<sup>19</sup> またR写本に比べるとT写本はB写本にある頭韻を継続するつもりがあるらしい(し、より良い頭韻を踏もうとする努力さえ窺える)。時折B写本とは異なる語彙を使っているが文脈上の大きな変更はない。例えば、Katherine Groupだけでなく *Ancrene Wisse* にも見られる語で *cointe* ‘wise, clever’ < OF *cointe* (MED見出しは *queint* (*e*)) などがそうで、OE由来の *cud* の代わりに用いられている。<sup>20</sup>

<sup>19</sup> *St. Juliana* の写本伝播については狩野(2014)を参照。

<sup>20</sup> SK5v12 (?Keiser: caesar with ON form? see Dance)

B 5v12, R 17r02, T137ra07 (SK) (alliteration retained but not with ON)

B Hei hwuch wis read of se **cud** keiser makie se monie

R hei - / hwuch wis read of so **icudd** keiser . makien so / monie

こうしてみるとB言語で書かれた作品は、それらが他の写本に書かれてゆく過程で言語的には同質性を保ちながらも、しかしながら一方では少しの進歩的な改変や逸脱などを経てB, R, Tの各写本に散らばって伝わる Katherine Group に属するそれぞれのテキストの内側に多様性あるいは多層性を与えている。これによってA言語から離れてゆくかと言うとそうではなくて、ジャンルが類似する *Hali Meidhad* と *Ancrene Wisse* に焦点をあててみると、Tolkienの言うように、A言語に共通に含まれている語彙を用いることさえ度々で、使用語彙の面からみればより接近しているといえなくもない。また *Ancrene Wisse* や Katherine Group に用いられた後に暫く用例が見みられないことがあるが、それはAB言語が当時の標準文語であったというよりも、ある宗教的共同体(修道院など)あるいはそれに付随する「ほぼ」同地域に属する写字生の共同体 (scribal community of the *quasi*-same region) に限定されうる言語であったことが示唆される。

## Selected Bibliography

- Bately, Janet. "On Some Aspects of the Vocabulary of the West Midlands in the Early Middle Ages: The Language of the Katherine Group." *Medieval English Studies Presented to George Kane*. Ed. Edward Donald Kennedy, Ronald Waldron and Joseph S. Wittig. Cambridge: Brewer, 1998: 55-77.
- Burnley, David. "Lexis and Semantics." *The Cambridge History of the English Language, vol. II 1066-1476*. Ed. Norman Blake. Cambridge: Cambridge University Press, 1992. 409-99.
- Chambers, R. W. *On the Continuity of English Prose from Alfred to More and His School*, EETS os. 191. London: OUP, 1932.
- Clark, Cecily. "Ancrene Wisse and Katherine Group: A Lexical Divergence."

---

T Hei hwuch wis read of se **cointe** / keiser . makie se monie  
頭韻を重視するSKでは写字生Tも / k / の音を留めている。ここでは文脈上ただ単に 'well-known' という意味だけでなく、'sly' とか 'notorious' などのニュアンスをもつ *cointe* に変更したのかもしれない。あるいはリズムを整えるためか。因みに *cointe* は1200年の初頭には既に(フランス語の定冠詞をともなつてではあるか) 苗字として用いられている。e.g. (1208) CRR (2) 5 251: Hugo le Cuint (*MED quaint*(e, adj.))

- Neophilologus* 50 (1966): 117-124.
- Dance, Richard. "Some Notes on Words Derived from Old Norse in *Ancrene Wisse* and the 'KATHERINE GROUP'" in Wada, 2002: 7-36.
- . *Words Derived from Old Norse in Early Middle English: Studies in the Vocabulary of the South-West Midland Texts*. Tempe, Arizona: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2003.
- d'Ardenne, S. R. T. O., ed. *Te Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne*, EETS os. 248. London: OUP, 1961.
- . ed. *The Katherine Group, edited from MS. Bodley 34*, Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l'Université de Liège 215. Paris: Société d'Édition « Les Belles Lettres », 1977.
- d'Ardenne, S. R. T. O. and E. J. Dobson, ed. *Seinte Katerine, Re-Edited from MS Bodley 34 and the other Manuscripts*, EETS ss. 7. Oxford: OUP, 1981.
- Dor, Juliette. "Post-dating Romance loan-words in Middle English: Are the French words of the Katherine Group English?" *History of Englishes: New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*, eds. Matti Rissanen, Ossi Ihalainen, Terttu Nevalainen, and Irma Taavitsainen. Berlin: Mouton de Gruyter, 1992, 483-505.
- Kano, Koichi. "The *Sawles Warde*: A Three-Manuscript Diplomatic Parallel Text, Trial Version," 『駒澤大學外国語論集』 第64号 (2005): 269-350.
- 狩野晃一. "London, British Library, MS Royal 17. A. xxvii における *Seinte Iulienne* テキストの伝播について" 駒澤大學総合教育研究部 『外国語論集』 第16号 (2014): 89-109.
- Kay, Christian, Jane Roberts, Michael Samuels, and Irené Wotherspoon, eds. *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary, with Additional Material from A Thesaurus of Old English*. 2 vols. Oxford: OUP, 2009.
- Ker, N. R. ed. *Fascimile of MS. Bodley 34*, EETS os, 247. London: OUP, 1960.
- Kubouchi, Tadao and Keiko Ikegami with John Scahill, Shoko Ono , Harumi Tanabe, Yoshiko Ota , Ayako Kobayashi, Koichi Nakamura (eds.) *The Ancrene Wisse: a Four-Manuscript Parallel Text, Preface and Parts 1-4*. Frankfurt: Peter Lang, 2003.
- . *The Ancrene Wisse: A Four-Manuscript Parallel Text. Parts 5-8 with Wordlists*.

- Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005.
- Mack, Frances M. ed. *Seite Marherete, þe Meiden ant Maryr: Re-Edited from MS. Bodley 34, Oxford, MS. Royal 17A xxvii, British Museum, EETS os, 193*. London: OUP, 1934.
- Millett, Bella. ed. *Hali Meidhad*, EETS os, 284. Oxford: OUP, 1982.
- ed. *Ancrene Wisse: A Corrected Edition of the Text in Cambridge, Corpus Christi College, MS 402, with Variants from Other Manuscripts*, vol. I, EETS os. 325. Oxford: OUP, 2005.
- Millett, Bella, and Jocelyn Wogan-Brown, eds and trans, *Medieval English Prose for Women: Selections from the Katherine Group and Ancrene Wisse*. Oxford: OUP, 1992.
- Millett, Bella, and Richard Dance, eds. *Ancrene Wisse, A Corrected Edition of the Text in Cambridge, Corpus Christi College, MS 402, with Variants from Other Manuscripts*, vol. II, EETS os, 326. Oxford: OUP, 2006.
- Ono, Shoko. “The Lexical Divergence Between the *Ancrene Wisse* and the *Katherine Group* Texts,” 『長谷川欣佑教授還暦記念論文集』 Tokyo: Kenkyusha, 1995: 601-613.
- “Some Notes on the Loan Words in the *Ancrene Wisse* Group Texts”, *Essays and Studies* (Tokyo Woman’s Christian University), vol. 53 (2007) 1-17.
- 小野祥子. “「あわれみ、慈悲」を表す中英語語彙についての一考察 -13世紀イギリス南西部方言宗教散文を中心に-” 東京女子大紀要「論集」第60巻(2号)(2010): 79-105.
- “異写本パラレル・テキストを用いたB言語からのAB言語検証：語彙の視点から” 『東京女子大学紀要論集』 第63号(2), (2013): 25-42.
- Ono, Shoko and John Scahill, with Keiko Ikegami, Tadao Kubouchi, Harumi Tanabe, Koichi Nakamura, Satoko Shimazaki, Koichi Kano, eds. *The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2011.
- Shepherd, Geoffrey, ed. *Ancrene Wisse: Parts Six and Seven*. Exeter: University of Exeter, 1985.
- Stevenson, Lorna and Jocelyn Wogan-Brown, eds, *Concordances to the Katherine*

*Group and the Wooing Group*, Cambridge: D. S. Brewer, 2000.

谷明信. “A Thesaurus of Old Englishは初期中英語に有用か? - The ‘Katherine Group’に現れた Word Pairsの観点から-” 兵庫教育大学研究紀要 第22巻, 2002. 23-30.

Tolkien, J. R. R. “Ancrene Wisse and Hali Meidhad.” *Essays and Studies* 14 (1929): 104-26.

Trotter, D. A. “The Anglo-French Lexis of *Ancrene Wisse*: a Re-evaluation.” in Yoko Wada ed. 2003, 83-101.

Wada, Yoko, ed. *A Book of Ancrene Wisse*. Osaka: Kansai University Press, 2003.

----- ed. *A Companion to Ancrene Wisse*. Suffolk: D. S. Brewer, 2003.

Wilson, R. M. ed. *Sawles Warde: an Early Middle English Homily edited from the Bodley, Royal and Cotton MSS*. Leeds School of English Language Texts and Monographs, No. III. Titus Wilson of Kendal, 1938.

Zettersten, Arne. *Studies in the Dialect and Vocabulary of the Ancrene Riwe*. Lund Studies in English 34 Lund: Gleerup, 1965.

----- “French Loan-Words in *Ancrene Riwe* and Their Frequency.” *Melanges de philology offerts à Alf Lombard al’occasion de son soixante-cinquième anniversaire par ses collègues et ses amis*. Etudes Romanes de Lund 18: Gleerup, 1969, 227-250.